

令和5年度（2023年度）第2回北海道幼児教育推進協議会議事録

日時：令和6年（2024年）3月27日（水）13時30分～15時00分

場所：Web会議システム Zoom

議題 1 説明

- ・北海道幼児教育推進センターの取組について
- ・その他報告事項について

2 意見交換

北海道版幼児教育スタートプログラム事業について

議事

議題1 ・北海道幼児教育推進センターの取組について

- ・その他報告事項について

1 事務局から資料に基づき、現在の取組状況等を説明

2 質疑応答

（委員）

北海道では自然を活用して、保育をすることが効果的で大事だという話は皆さん異論がないと思いますが、資料2の10ページに、「幼児教育施設の園庭・屋外遊戯場に設置されているもの、特に活用してるもの」という興味深い調査が示されています。

そこで、「特に活用されてるもの」で、一番大きい数字を示しているのがビオトープということになります。その左に記載されているビオトープを持っている園が4.2%と一番少なく、ある意味、対照的な結果が出ています。ビオトープは広く知られている言葉で、概念については、理解にばらつきがあると聞いております。例えば、ビオトープの中に水の流れや水場がないとビオトープとは言わないと思っている方もいるし、地域の自然がある程度、再現されていれば、ビオトープと呼んでよいという認識をされている方もいます。

ビオトープを持っている園が4.2%に留まっている状況と活用頻度が一番高く、遊びの中心になっている状況に対してどのように考えているのか、また、参考までにどのような概念でのビオトープを想定したのか、ご回答をお願いします。

（事務局）

ビオトープについては特に大きな定義を持って、この質問項目を設定したわけではありませんので、委員がご指摘されたとおり、回答される方の考え方や認識などによっては回答にばらつきがあったと思います。このことは私たちもあまり気づかなかった点でもありますので、ご意見とさせていただいて、次の調査には生かしていきたいと思っております。

（委員）

ビオトープは地域の自然を再現するという緩い考え方であれば、どこの園庭でも実現可能な環境なので、ぜひその幅広い概念の方も広めていただいて、遊びの中心になっていくようにご配慮いただければありがたいです。

議題2 意見交換 北海道版幼児教育スタートプログラム事業について

(委員)

センターから資料の説明があって、本当に興味深くて、いろいろなことを確かめたい、活用したい、それから、自分がこれからこういったセンターの仕事をお手伝いしていく際に根拠とするための遊びの中身等も含めた調査であったと思いました。

そして、これから始まる議論について、皆さんからどのような意見が出てくるのかとても楽しみにしています。私自身は幼小の接続期とは一体何なんだろう、つまり、幼稚園、保育園、認定こども園は卒園までに育てたい10の姿を一つの目安に、様々な体験を通してそれぞれの園が子どもたちの豊かな育ちを引き出していく。そして接続する小学校において、一番理想なのは、例えば3月に卒園して、4月に小学校に入学した子どもに小学校の先生方が「はい、先週の続きはね」というような形で卒園した子どもたちをその幼稚園や保育園などからの「続きはね」という形で引き受けいくということが一番理想なんだろうということを思っています。

僕自身が2年前に札幌市内の小学校長約50名に道徳の研修だったのですが、小学校入学までに育てたい10の姿の話などをしたとき、ご参加の先生の半分は10の姿についてご存知なかった。そのような状況を不安に思っていました。先ほどのセンターの説明で管理職研修を実施して、幼児期の理解の徹底を図り、架け橋に小学校のいろいろな働きかけが重要だという理解を進めてもらいたいと思います。各地域で架け橋期の連携活動を重視し、小学校からの働きかけ、あるいは幼児教育施設の思いを受けとめることのできる小学校の体制づくりなどが大事なのかなという思いにさせられました。

そして、モデル地域の実践事例は貴重です。これを参考にしながら、各地域が新たな教材開発に取り組んでいく。僕自身もこれは素晴らしいと思う事例を、実際に体験してきていますので、皆さんの方からご意見が出た後に発言の機会があれば、そういったことも紹介させていただきながら、新年度に北海道として、幼稚園、保育園、認定こども園から小学校へ架け橋の質の高いものを実現していくことを皆さんと進めていければいいなと思います。

(委員)

資料4のえりも町と佐呂間町の取組が大変、大事な資料だと思ったところです。

架け橋期の重要性ということがありますが、私たちが北海道版幼児教育スタートプログラムを作成しようとしたときに、幼保小の交流はしているが、カリキュラムや中身のところまで、子どもの育ちのところまで繋がっているところは本当に僅かだった。それが先ほどの資料の中では少しずつ増えてはきましたが、えりも町の方でも、佐呂間町の方でも課題のところでお互いの共通理解がまだ十分ではない、不十分ということが挙げられています。具体的には、お互いの発達段階による違いやカリキュラムというところが理解できていないということだったのです。

この二つの地域は本当に先生たちと教育委員会の皆さんと何度も何度も会議を重ねて、視察に行ったり、カリキュラムを持ち寄って、一つのカリキュラムの形を作ったり、引継ぎのためのシートを具体的に作ったりしているのです。そういう中で、先生たちが交流できた、顔と顔を見合わせる関係が構築できたことが、一つ大きなところではないかと思うのです。

あとは、これを全道に広めていくにあたって、このモデル事業は人口4000人規模のえりも町と佐呂間町なので、小さい地域にはとてもいいなと思うのですが、今度は都市部とか中堅規模の町などがどのように、こうした形を応用していけるかなどが大事になってくると思いました。

(委員)

資料4は本当の概略ですが、私は普段から小中高を見たときに、幼児期からの家庭との関わり、子どもの姿が十分把握できていない中で、様々な課題が生まれてきているので、何とか幼児期と小学校を滑らかな育ちとするために先生方の指導ができないかと考えていたところ、この事業を紹介していただきました。前にも資料が出ているかもしれませんが、今年度の会議は全体で2回、それから管理職が行うカリキュラム検討委員会が3回、そして、具体的にそれぞれの幼保小の先生方のワーキンググループを6回を行ったところです。

一番大変であったのは意識改革です。学校の方はどう育てるかという計画目標と具体的な活動は教育課程ということですが、幼児教育施設の方ではどうなのかなということで、うちの町ではそのところが幼稚園、保育所で違うこともあったり、また具体的に示されていない状況がありましたので、この部分を整理するためには、まず、理解をいただこうということでした。取組を進めていく中で、幼児教育施設の方々にこれを取り組んでいく必要性を理解していただくことにすごく時間がかかりました。とりわけ保育所は保育という概念が非常に強くて、幼児教育という意味で取り組むということに抵抗感もありましたが、今年になり、そういったことが払拭されて、具体的に先ほど示されたようなスタートカリキュラムを作成する状況になったところです。

ワーキンググループの会議には、先生方のほかに、保育所を経験したアドバイザーを1人配置しています。これが功を奏しているところであります。それから、円滑化推進会議やカリキュラム検討会議のときには、町長部局の保健福祉課や町民生活課、PTAの方々に入っていただいて話をすることが幼児教育施設と学校だけの関係者だけではないため、非常にプラスになっています。また、学識経験者からも助言をいただきながら、スクールカウンセラーにも入っていただいて開催したという状況です。

うちの町は高校までが町立なので、小中高はそういうことをかなりやっているのですが、そこに幼児教育施設を繋げていけば、実施できるという見通しの中でやることとしました。最終的には文科省や道教委でも話している知育・徳育・体育の知徳体における3つの資質・能力をしっかりとまずは示すこととそれに向かっての10の姿がその3つの資質の基礎になります。

これを示しながら取組を進めていますが、この10の姿を手がかりに資質・能力に繋げていくんだというところがなかなか理解されなかったというのがあります。今後は、具体的には3つの資質・能力を育てていくには何をするのかということで、資質・能力を育てるための具体的な活動を幼小中高で示しながら、令和6年度は進めていきたいと思っています。

(委員)

附属幼稚園と小学校間での連携はこれまで出来そうで出来なかったもので、「お互いの様子をまず見ましょう」というところから始めています。連携といっても机上の連携になっていたり、話だけになっている。また、行事や子どもの入学するときの情報の交換ということが中心になっていたと思うのですが、やはり、普段の様子をお互い見合うというのが大事ではないかなと思っています。えりも町のような連携とかワーキンググループなどを行うことも当然ですが、そういうこともしながら、あの普段の様子をある意味気軽に見合うということがすごく大事ではないかなと。そうすると幼稚園の先生たちも小学校のイメージが湧いたり、小学校の先生たちも幼稚園ではこんなことができるのかと思うことがあると思います。数年前に自治体の会議でも話したのですが、本当はどのようにやるのかがわからないのですが、市や教育委員会が主体になって、例えば、年に何回か見学に行こうというようなことは大事ではないかと話をしたこともありますが、なかなかそういうことにはなっていないんです。しかし、現場ではお互いを見ると、本当に小学校の先生は「こんなに幼稚園の子たちはできるんだ」と、それだったら1年生の指導を考えなければならぬということを言われたことが過去にもあります。ワーキンググループみたいなことで、そういう連携を進めていくカリキュラムを作っていくのも必要ですし、一方では、緩い連携というんですか、それに見合うようなことが必要ではないかと思っています。

そういう意味では、なかなか行き来できないのですが、えりも町でやっていることなどを実際に見てみたいと思っていました。国公立の中でもスタートプログラムや架け橋のことは話には出のですが、なかなか全国的には進んでいないような状況があります。

小さい町では、本当に皆さんがお互いに見合えるというか子どもや兄弟などの関係で知っているという実態があったのでやりやすいと思うのですが、少し大きい町ではどのようにやるか、私は教育委員会や行政が主体になってやるのが大事だと思っております。

(委員)

先ほどの報告の例えば資料6の幼児教育相談員派遣事業の一番最後に、一部の幼児教育施設ではこの事業が認知されていない実態もある、また、新しい北海道版幼児教育スタートプログラム事業の周知についても、当協会では年数回大きな会議等があり、そこに全道の各支部長等も来ていますので、幼児教育推進センターからの説明の場や会員への周知など、協力してまいりますので、ぜひ何かあったらご連絡いただければと思います。

(委員)

教育内容というよりは、その前段として、どの程度まで自治体の中で地ならしができるのかというところに、非常に懸念を抱いております。意見交換の論点メモの中にもあったと思うのですが、私も旭川在住なのですが、旭川の小学校は大体50校ちょっとあるはずですが、それにぶら下がる保育園、幼稚園、こども園が100箇所ぐらいあるのです。無認可を含めるともう少し増えると思うのですが、要はこの幼保小の連携するプログラムを作っていくことはとても大事だと思うのですが、そのときにどういうテーブルを囲めるのかということも議論しないと、上滑りしてしまう気がするんです。スタートカリキュラム、あるいはアプローチカリキュラムなんかも一体どういう形で作られているのかということも町の大きさによって違うと思うのです。それはこれからスタートプログラムあるいは架け橋プログラムを動かすとなったときに、資料にもあったと思うのですが、首長部局で動いているのか教育部局で動いているのかということもありましたが、えりも町あるいは佐呂間町のように、ある程度コンパクトに進められる町もあれば、札幌市のように区単位で動かせるところもあります。また、函館や旭川のように大きさを持ったところは一体どこでどういうテーブルを作るのか、誰が旗を振るのか、このことがとても大事で、大変素晴らしい試みではあるのですが、これが形骸化してしまうと、実施したことにして進んでいくような気がしております。論点メモにもあったのですが、もうちょっと様々な自治体の規模に応じてどの部局がどういう役割を果たして、どういった代表者会議的なものがあって、その下にそれぞれの小学校がどういうふうに関係したか、階層的な取り組み事例なども集めないと、現実的に動かせるのか非常に心配しておりますので、何とかそういう事例もうまく集めながら好事例ということで、周知いただければありがたいと思っています。

(委員)

函館市も小学校と保育の連携ということで、何度かその話はあったのですが、近くの校長先生と交流を図ったとしても、よい感じで進みそうになると校長先生が異動になってしまい、次に着任した校長先生が保育園との交流にあまり積極的でない場合もあります。そうすると先細りで立ち消えになってしまう。したがって、函館市では、校長先生が異動しても大丈夫なように、そのときの保育園の代表の人、幼稚園の代表の人、函館市の保育の担当部局の係長クラスとで基本的な話を決めていこうということで、昨年8月に1回目の会議が開催されました。今後は必要に応じて開催することになっています。

今までは保育要録のことでしか保育園と小学校が繋がっていなかったのですが、うちの保育園では1月に小学5年生の児童が10人ずつ、計4回、年長の子どもたちとの交流、キャリア教育の話でしたが、例えばそういうことで交流を図ることが幼小連携の大きなきっかけになると考えております。もちろん引率してきてくれた校長先生や担任の先生ともそのときは当然ながら交流を図ります。その上で小学校の校長先生や担任の先生の基本的な考えを理解できた気がしておりますので、もしかしたらそういうことが第1歩なのかもしれないと考えておりました。

(委員)

基本となる考え方は、幼児期の子どもの学びや育ちを連続させることだと思っています。いろいろな施設で生活している5歳児のこういったものを基礎にしていけば、良いスタートが切れると思います。これを、生かさないのはもったいないことだといつも思っています。当園の取組を少し紹介します。コロナで少し停滞していたのですが、小学校との行き来を復活させました。園の公開保育や参観日などに、近隣の小学校に声がけて、見学にきていただいて、最初は校長先生ぐらいでしたが、徐々に担任の先生などにも来ていただいています。子どもたちも学校の方に遊びに行って、体験をするということもやっております。そういったことで、本当に滑らかにスタートを切れればよいと思っています。先ほどお話があったように、先週、卒園した子どもたちが、入学したときに「先週はね・・・」とそれくらいの連続性が持てると本当にいいと思っています。

1つ課題だと思うことは、今、話したように小学校と園とは単独で交流はしているのですが、地域で推進していく際にそのネットワークや声掛けをする機関などが見当たりません。先ほど、話にあったように市町村が先導していただけるのも1つだと思うのですが、えりも町の事例を聞いていて、幼小接続アドバイザーという方がどういった活動をしているのか、少し聞いてみたいと思いましたし、このような仕事をする方が今後キーワードになるのかと思いました。

(委員)

持続的で広域的なものとするための方策ということで1つ課題になっているのが、10の姿に対する考え方に誤解があると思います。各地の小学校などの先生とやり取りする中では、10の姿を到達目標だと誤解されている方が非常に多いです。これはできつつある姿ですので、個人にとってばらつきがあり、できていなくてもそれに向かっていく学びの姿というのを大事にしていこうという姿ですから、到達目標で何ができるようになった、あるいは何ができないという話で終わってしまうと、その先の子どもたちが頑張っている途中の姿が見えなくなることがあります。それで、小学校以降との繋がりで言えば、主体的・対話的で深い学びという言葉が学習指導要領の中にも入っていますし、幼稚園でも子ども主体の保育ということを進めていますので、子ども主体という言葉が一体何を表しているのか、それができるようになったことできないことなのか、それとも、子どもたちが興味・関心を持って努力していることなのかなど、視点を揃えるのが大事だと思いました。

2点目はそれを実現するためには大人の話ではなくて、子どもの姿をベースとした目の前の子ども個人が何に興味・関心を持っているのか、何を頑張っているのかなど、子どもの姿をベースとした話し合いや振り返りが必要だと思っています。具体的には公開保育などに小学校の先生にお越しいただいて、保育者が子どもの育ちの姿をどう見ているのかということ子どもをベースに共通理解を図るということです。あるいは、幼児教育施設側も小学校に訪問させていただいて、どこまで進んでいるのかということではなくて、個人個人の子どもが今日、一体何を感じてどんな活動をしたのかということ相互に参観して、忌憚のない意見で語り合うことが大事だと思えます。

3点目はそういった形を実現するためには、要録の書き方から考え直さなければならないと思っています。各保育施設では今、ドキュメンテーションというものが進んでいて、エクセルに表組みされたものに、気になること、できたこと、できないことなどを文字で書くよりは写真とエピソードによって遙かに育ちつつある姿を伝えることができるようになっていきます。

しかし、なかなかドキュメンテーションの活用は進んでいない状況にありますので、要録においてのドキュメンテーションの活用が進めば、育ちつつある姿、子どもの姿が広く広がっていくのではないかと思います。

全体的なことと言うと、このいろいろな資料に関してもそうですが、子どもの視点、子どもをどう考えているのかという論点がやはり抜けている気がします。こども家庭庁でも子どもの意見をどう吸い上げたか、自分がどう感じているかということが詳しく書き込まれるようになりましたので、例えば、今日の論点についても、子どもの視点というものを意識した書きぶりに変えていただけると、広がっていくのではないかと考えています。

(委員)

お話を伺っていて、保育園や幼稚園関係者の皆さんの視点から貴重な意見が多いと思って聞いてました。幼保小連携は連携ですので、幼児をどう育むか、どういう力を育むかという視点と小学校としてその子どもたちをどう伸ばしていくのか、そしてその先を見据えて中学校へ繋いでいくのかという両方の視点が大事になってくると思います。小学校の立場から、小学校ではこういう子どもたちを育みたいと願って、そのためには、どう、小学校内でカリキュラムマネジメントをして、子どもたちの学びを深め、広げるかというお話を聞きたかったのですが、1つはカリキュラム・マネジメントだと思うのです。小学校の中だけ、中学校の中だけと水平軸でのカリキュラム・マネジメントは話題になります。では、縦軸のカリキュラム・マネジメントはどのようになっているのだろうか、このことがスタートプログラムの肝ではないかと考えています。今日も実は職員室で教頭先生と話題になったのですが、本校では小学部にも中学部の重複障害関係があって、そこで、行っている教科領域の学習にちょっとずれがあるのです。例えば、小学部で社会性というものを学ぶために、日常生活の指導というものをやっています。「中学部では日常生活の指導は次年度からは行いません」という教育課程の話になったりするのですが、そういったときに、「中学部では社会性の指導はやっていないんですか」というとやっています。ただ、扱っている教科や領域が違うということであって、校内での縦のカリキュラム・マネジメントをしっかりできているのですが、先生方がそこを意識してやっているのだろうかというようなことを教頭先生方と話しました。

これは幼稚部と小学部の渡りもそうです。社会性という部分を幼稚部ではどういう活動で育むと考える教育課程を組んでいるのか、こういうことがやはり先生方の中で途切れているから、一貫性やスムーズな連携・接続などが、なかなか一歩進まない。わかっているけど進まない。進まない要因は何だろうかと考えたときに、皆さんのお話を伺ってやはりカリキュラムという部分を改めて見つめてみる必要があるのかなと聞いていました。

また、このことを実際に地域でどういう単位で実施するのかと考えたときに、特別支援学校の話で申し訳ないのですが、地域の小学校、中学校、幼稚園等で、気になる子どもたちをどう支えていくのか協議会を立ち上げて検討する場合の規模は中学校区だと思うのです。中学校を中心としてその下に小学校がぶら下がって、その下に幼児教育施設があるので、中学校区で考えるということとはよくやっていました。したがって、このスタートプログラムの幼保小の連携も中学校区という単位で関係者がそれぞれの授業とか保育を参観したり、どのようなカリキュラムなどが考えられるのか、それぞれの思いを並べて整理をするということは意義があると思いました。

(委員)

幼保小連携について、中学校を核にしてという話がありましたが、帯広市では平成25年から中学校を核として、エリアファミリー構想というものを設けて、その下に、幼稚園、保育所や認定こども園、小学校がぶら下がる形で取り組みを進めているところです。エリアは中学校が14あるので、14のエリアファミリーでやっております。そこで、エリアファミリーの児童生徒について、情報共有や検証を深めながら育ちを繋ぐ、学びを繋ぐ、教職員や家庭、地域を繋ぐ視点を持って、教育課程の編成を進めているところです。

教育委員会が主体となって実施しておりますが、保育所や幼稚園は首長部局の方に担当課があるため、その担当課と連携を図りながらやっているところです。この構想を進めるに当たって留意すべきことは、幼保小の連携では0から18歳までを見据えて、関係者が対話を通して子どもたちの育ちを大切に、協働することにあると考えていますので、目指す子ども像を共有しながら、その実現に向けて、関係者が年3回以上、対応する機会を設け、実現に向けて進めているところです。

また、十勝としても十勝教育研究センターを持っていますので、そちらを運営しながら、その中で、講座を設けながら、取り組んでいるところです。

架け橋期の教育の充実に向けて、指定地域等の好事例を周知していただくともに、この研修パッケージ等による普及啓発を期待しているところです。

(委員)

私も保護者という立場から参加しているのですが、小・中学校の保護者と先生の会ということで、ご意見をさせていただくのであれば、保護者に対する何かというものが、ほほないように見えます。教育というのは学校だけで行うものではないと私は思っています。さらに、幼児教育と小学校の架け橋期というのは、親のサポートなしでは無理だと思うのです。年長さんになって、「大きくなったね」、「大人になったね」と言っても、どうしたいのと聞いたことがそのまま形になっていくことが理想だと思うのですが、難しい部分もあると思うのです。子どもたちの意見を聞くことは大事ですが、例えばプログラムを進めたいという場合になって、学校と行政だけで進めればいいのか、保護者は何が今、行われているのか知らなくてもいいのかということは、少し問題があるのかと思います。やはり、同じ方向を向いて、全て同じ方向に進むのがいいとは思わないのですが、大きな大義があるのであれば、良いものであるという説明をしっかりと保護者にも伝えて、家庭教育の中でも、今、このような世の中に必要とされる人を育てていく必要があるという認識を持った上で、進めていかないとならないと思うのです。

少し外れた意見になってしまうかもしれませんが、保護者として参加させていただいてる以上、どこを見ても親のことは全く書いてないということが少し気になりましたので、一言、伝えさせていただきました。

(委員)

先ほどお話があったとおり、保護者の観点からということについては同じことを思っていましたので、ここについては、中学校は少し難しいのかもしれませんが、委員の構成は幼児教育施設の園長先生が多いと思いますが、小学校の校長先生をはじめ、現場の関係者の方々、もう少し小学校の観点からという視点で構成を考えていかないと小学校の方の協力や連携が進みにくいと感じています。

次に資料を見て思ったことですが、資料の2番になるでしょうか、ページ数で言うと、4ページになります。資料にはステップ0～4と記載をされているのですが、ありがちなのですが、「そう思う」「思う」などアンケートの上で肯定的なもの、否定的なもの大枠で分かれる、0～2と3～4というのはひとまとめで同じと考えることができると思うのです。したがって、令和3～5年の経過を見て、実は私的にはこのグラフを見ると、この2年で変わってるようには見えない、ステップ2が多いままということが大変気になって、確かにステップ4が少しずつ増えているということは非常によく分かるのですが、このステップ2が構成的にも1番多いという状態が続いているということが、何回も会議に出席させていただいていますが、幼小連携・接続の取組があまり進んでいるようには見えないと思うところは、グラフにも表れているのと思いました。

(事務局)

たくさんのご意見ありがとうございました。次年度に向けて取り入れなければならないこと、私たちの中で視点として落ちているようなこともご指摘をいただきました。保護者の視点、子どもの声など、様々思うこともありましたので、反映させていきたいと思っています。最後に大越委員から幼小連携の取組が少し停滞しているのではないかとのご指摘もいただきました。

私たちが前回の協議会も含め、今回の調査の結果も踏まえて、ここが大きな課題と考えて、やっぱりステップ0～2の市町村、幼児教育施設、小学校をどうやって繋いでいくかということ課題にしており、先ほども説明をしたのですが、各地域に出先機関の教育局がありますので、教育局と教育委員会等で連携を図って、何とかステップ2の交流段階から次のステップに繋げるためにいろいろと関わらせていただいているのが今の状況です。

したがって、来年に1つでも多くの自治体が幼小連携・接続の意識を高めていければと思っています。そして、うまくいった自治体の取組みをこの後、広めていきたいと考えていますので、少し停滞というご指摘をいただきましたが、ぜひ、今後の取組みにも注視していただいて、次年度、また結果が出るとお思いますので、ご意見をいただきたいと思っています。ありがとうございました。

(委員)

うちの町では、私と幼小接続アドバイザーの2人でいろいろと考えてやっています。それで先ほど、苦労や大変だということをお話したのですが、宮崎委員からお話があった自治体によって人口規模だとか、様々な漁村、農村も含めてですが、そういうことでの取り組み方はいろいろ違うと思うので、工夫して取り組んでいく必要があります。ただ、私は幼児期と小学校の接続が滑らかになることは全てに共通する課題であって、皆さんそうだと思っているので、そこを進めていくためにはどうしたらいいのかということ、それぞれの大小中の自治体が組織を作って考えていくということになると思います。

また、帯広市はエリアファミリー構想という形で進めていて、要するに結局、実施するかしないかの話なんです。PTAからのお話がありましたが、うちの町も今町の代表の連合PTA会長さん1人しか入っていません。現在は現場サイドでしっかり理解して進めていく段階なので、本当にレベルは低いです。当然、最終的には保護者も一緒にやっていかなければならないことは当たり前のお話だと思います。

それから幼小の接続アドバイザーは他の町からうちの町に転居してきた方が過去に保育所の先生で子どもさんもいて、保育所に子どもを通わせていた方で、ぜひ、このような事をやってみたという話があり、結局はいろいろな橋渡しをほとんどこのアドバイザーがやっております。保育所に関わることを、幼稚園、小学校そして3者でやること全てをこの人が動かしているのです、こういう役割を担った方がキーポイントになるのかなと思います。

保育所も本当に園長さん始め、理解をいただいて、現在、取り組む状態になっているのもアドバイザーの力であり、幼児教育に関わることを保育所の方にもお話をしながら理解をいただいて動いているということでもあります。

それから、10の姿については私も勉強していますが、要は幼稚園教育要領、保育所保育指針、もちろん小学校の学習指導要領にも書いています。ここに具体的な姿が書いてあります。それを幼児教育施設と小学校と一緒に理解し合うというのが私は大事なかなと。具体的に何をやるかはそれぞれの幼児教育施設で到達ではないということなども踏まえながら、進めていくことが必要とされているところだと思います。

(委員)

保護者との対応は幼児教育ですごく大事です。家庭での育ちと園での育ちは別れてはいけません。先ほどの私のお話の中では、ドキュメンテーションの活用という中に含まれておりました。ドキュメンテーションは、要録として活用したいということをお話しましたが、園で作成しているドキュメンテーションは、子どもの1人1人の園の中の成長の記録であります、それからその成長の記録を保護者と共有して、子どもを中心に家庭教育と園の教育を繋げていこうという1つのツールでもあります。ドキュメンテーションの中に子どもの表情やつぶやきなどが入っていますので、園でそんなことを楽しんでいることが家庭でのこういう遊びに繋がっているんだとか、そういう遊びが園で流行っているなら、家庭にこのような物があるから使ってくれないかなどお互いに協力し合って、良い環境が築けたりします。

それから、子どものつづやきやその反応を元に、翌日の園での環境構成の根拠になりますので、計画に結びついているということが言えます。さらに、より質の高い保育を目指すために先生たちでこのドキュメンテーションを活用して、研修の資料として活用することで、共通の実際にあったことを基に質の向上についてそれぞれの意見が集められ、成長の記録、保護者との連携、研修の資料、そして環境構成の根拠という4つの大きな目的のほかに要録として使う。そうすると、保護者と園と小学校との共通の資料をもとに子どもの成長を見通していけるので、それぞれの立場で格差がない情報を共有できる非常に良い取組だと思っております。

(委員)

先ほどの保護者に対する話では、幼児教育推進センターからも家庭教育支援の保護者向けのチラシが出ています。そういったものも確かめていただいて、私たちみんなが幼児教育施設と地域と家庭という三位一体になって、子育てをしていくんだというその視点を失わないでやっていこうと改めて思いました。それから、私たちはこの幼児教育推進センターが立ち上がったときの原点を忘れてはいけないと思います。北海道の子どもたちの学力や体力がなぜ全国と比較して、こんなに低いのか、この状況は何とかしなければならないと考えた時に、世界の教育の動向の中で幼児期が大事だという話が出てきて、北海道も幼児期から丁寧な教育をして、北海道で育つ子どもたちの体力も学力もあわせて人格も豊かなものにしていきたい、「北海道は素晴らしい地域だぞ」と言われるようにしていきたいという願いが根底にありました。私たちは縦軸で教育活動を考えていこうと、これが根底にあるんだと思いを共有しておきたいと考えます。幼稚園、保育園、認定こども園というのは最近2～3年、縦軸が育ってきています。つまり、幼稚園教育要領等の5領域の内容の3つの柱にこの発達段階を踏まえた連続性のある縦軸の子どもの育ちの見方、これについては先ほど話にあったドキュメンテーション、1人1人の子どもの育ちの理解ということで、これが広く普及してきたことに、それにもよると思っています。この縦軸を保幼小の連携にそのままスーツと持って行って、小中もそれに連動していく。ただ、最近、よい傾向だと思ってきているのが、北海道の児童生徒の学力の現状で、中学生の学力の平均値が昔はずっと低かったのですが、結構上がってきているわけです。これは、小学校は急ぐことがないというのが僕の思いで、幼児期に元気いっぱい遊んで、豊かな心や学びに向かう力などの基本が育って、小学校で基礎学力と学び方の教育を受け、中学校に入った頃から確かな学力が身に付いてきて、北海道の子どもたちはしっかりと育っていくんだと、そういう姿が北海道らしい子どもたちの縦軸での育ちではないかなと私は願いを持って見守っているところです。

そこで、今、皆さんのお話を聞きながら、保幼小の確かな接続のためには、小学校が幼稚園、保育園、認定こども園に対してもっと心を向ける、既にそれができるところもあるのですが、ただ行き来するだけではなくてもっと活動の中身なども理解し合う、特に小学校の側から理解する。モデル事業についても質の高い遊びについて追及したい。遊びを通して、環境を通して、四季を通して、子どもたちは本質的に五感を通した体験を通して、楽しく育っていく。その中に質の高い遊びを私たちが探し出して、それが実を言うと、小学校の生活科あるいは3、4年生の地域学習、そういったものにも重なっていくような、そして場合によっては、その先の環境問題、自然破壊、あるいは産業の発展などの中学校、高校の学びに繋がっていくような、各地域の子どもにとって、楽しく参加できる活動、そういうものが各地域ごとにできればいいと思ったりしています。

分かりやすく1つ事例を挙げますと、これは10年も前になりますが、枝幸の幼稚園の事例で、園児たちが鮭が遡上してくる姿や漁を見て、それを絵に書いたり、あるいは採卵を見たり、そして年長さんが放流に参加したりする。放流するときに、「おじさんこれいつ還ってくるの」と聞き、「3年後か4年後だよ」というおじさんの声を聞いて還ってくるサケを思い描く、そしてその後の小学校の学習の中で還ってくる鮭を教材にしなが、生活科や中学年の地域学習を展開していく。私がおの翌年に参観に行ったときには、ちゃんちゃん焼きを食べた後、年長さんがダンボールで鮭の模型を作っており、これは先生も一生懸命、手伝っていました。その模型のふたを開けると、心臓や腸などの内臓がパズルになっているのです。それを小学校の先生が参観されて

いたのですが、研修の折に「内臓などの人体の勉強というのは小学校の高学年だから、そんなの難しすぎるよ」と少し厳しい指摘をしていました。しかし、ただ子どもたちはそれを楽しんでいる。興味・関心を広げ深めている。それを見て、小学校教員も子どもたちってこんなことで楽しんでいるのだと認識する。こういった地域の幼児教育施設の公開研に参加し、あるいは共催し、地域の小学校としてどういう教材を開発ができるか、そして保幼小の接続をどう考え行かうかということを考えていくことができるのだと思います。

私は次年度に向けて、保幼小連携のいろいろな事例がある中で、それぞれの例えば、地域の産業、地域の祭りなど、食育も含めて、小学校が地域教材で扱うようなことの幼児期からの楽しい参加事例を育ててもらいたいと願っています。地域の保幼小連携が質の高い教材開発とともにあれば、保幼小の結び付きがさらに強くなることだろうし、保幼小連携の目指す姿がそこにあるのではないかと考えながら聞かせていただきました。

(委員)

先ほど意識改革が必要だと話されていましたが、まさにそれは先生たち、保育者たち、そして教育委員会など私たちの意識を変えなければいけない。子どもはのびのびと育ててほしい。保護者の皆さんもいいんです。子どもはね、これまではどれだけ苦労しながら育てていたか、この子どもの前にいる私たちが変わらなければいけない、保護者の方はそんなに変わる必要はなくていいのではないかと思いつつ聞いていました。